

ワークショップのファシリテーションを学ぶためのカリキュラム・デザイン

Curriculum design to learn facilitation of the workshop

内記 麻子*1 北川 美宏*1 森 玲奈*2 山内 祐平*2 小柳 和喜雄*3
Asako NAIKI Yoshihiro KITAGAWA Reina MORI Yuhei YAMAUCHI Wakio OYANAGI

株式会社CSK*1 東京大学 情報学環*2
CSK Corporation Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo.
奈良教育大学*3
Nara University of Education

〈あらまし〉 教員養成課程に在籍する大学生・大学院生を対象とした、ワークショップのファシリテーションを学ぶためのカリキュラム・デザインを行った。このカリキュラムには、ファシリテーションに関する研修と2回のワークショップ実践、そのふりかえりなどが含まれている。本発表では、カリキュラムの内容について紹介した後、それを通じて受講生がどのような気づきを得たかについて報告する。

〈キーワード〉 ワークショップ、ファシリテーション、カリキュラム・デザイン、高等教育

1. はじめに

こども向けワークショップは普及している。一方、積極的に外部団体と連携する学校は、まだ一部に留まっている。背景には、学校教育である授業と学校外学習であるワークショップは、教育目標や評価に対する価値観に差があるため、信念体系に齟齬と葛藤が起こっているためであると考えられている(山内ほか 2010)。

そこで、本研究では、ファシリテーションに関する研修と、2回のワークショップ実践を含むカリキュラムをデザインした。

この実践は、奈良教育大で開講された半期のカリキュラム「教育工学特講 2010(担当:小柳和喜雄教授)」において行われた。受講生は教育学部の学生2~4年生、10名と大学院生2名である(受講生A~Lとする)。

このカリキュラムでは、ワークショップのファシリテーションについて、実践を通して学ぶことを目的とした。

3. 実践の概要

《1. ファシリテーター研修》

CAMP (Children's Art Museum & Park : CSKグループの次世代育成CSR)のファシリテーター研修会プログラムを使用し、講義形式でファシリテーションやワークショップのしつらえについての紹介を行った。また、ワークショップの体験会や、こども役・ファシリテーター役を設定してのロールプレイなども行い、実践を想定した研修とした。(2010年11月13日大川センター(CAMPのワークショップ開発拠点)で実施)

《2. ワークショップ実践①》

参加者として小学生18名を招き行われたワークショップ実践①では、進行を務めるチーフファシリテーターにCAMPスタッフ、その他のファシリテーターにCAMPスタッフ1名と学生のうち4名が参加し、残りの8名は少し離れた位置

表1:カリキュラム構成「教育工学特講2010」

日時	内容
2010/10/7	講義「教育工学研究とは何か」
2010/10/14	講義「ワークショップとワークショップデザイン」
2010/11/4	講義「クリケットの歴史と背景にある思想」
2010/11/13	ファシリテーター研修@大川センター
2010/11/25	研修の振り返りと実践①の準備
2010/11/28	ワークショップ実践①@大川センター
2011/1/6	実践①の振り返りと実践②の準備
2011/1/23	ワークショップ実践②@大川センター
2011/2/3	成果発表会

2. 実践の対象と目的

からの見学とした。

プログラムは「CAMPクリケットワークショップ」(4時間)を利用した。クリケットワークショップは、MIT メディアラボで研究開発された乾電池式の小型コンピュータ「クリケット」と様々な素材を使って動くおもちゃをつくるワークショップである。ファシリテーターとして参加する学生は、当日ワークショップが始まる前までにプログラミングの練習とリハーサルを行った。(2010年11月28日大川センターで実施)

《3. ワークショップ実践②》

2回目となる実践(クリケットワークショップ(4時間)・こども参加者19名)では、チーフファシリテーターを含め、全てのファシリテーターを学生が担当した。また、テーマやサンプル作品の制作、ワークシートの準備なども学生が行った。(2011年1月23日大川センターで実施)

また、実践ごとにレポートを作成し、翌週の授業内で共有した。

4. 実践の結果と考察

各実践後の学生レポートによると、彼らが学んだことや、教師、授業との違いを感じた主な点は以下の通りである。

教師とファシリテーターについて

「こどもとの距離感が教師とは違う。威厳はなく、良きアドバイスをくれるお兄さんお姉さんのような存在。こどもが気軽に話しかけられる」(受講生D)

「20名前後のこどもを5~6人のファシリテーターでサポートする点に教師との大きな違いがある。ファシリテーター同士が連携し共通の意識を持って、こどもの対応をすることが重要だった。教師は1人だが、ファシリテーターは、困ったことは相談し、共に対策を考えることができる」(受講生A)

授業とワークショップについて

「授業では目標が定められて工作を開始するが、ワークショップでは、こどもたちがそれぞれに目標をつくって工作していた。創造力や発想力を伸ばす学びだと思う」(受講生F)



図1: ワークショップ実践の様子

「開催前に時間をかけたリハーサルをする点が違う。こどもの視点に立って考えると、見えてくる問題点や改善点があり、事前に気づき対応することができる」(受講生E)

「授業づくりに活かしたいが、学校とは掛けられる時間や人数が違うので、全てを取り入れるのは難しいと思う」(受講生B)

授業の初回では、ワークショップは何のために行うのか目的が良く分からないとの意見があった。実践を通してこどもたちの活動の様子を実際に見ることで、結果ではなくプロセスに重きを置くことに魅力を感じたという意見が出てきた。

また、ファシリテーションは、実習やスクールサポート(奈良市が実施している教員補助として小中学校に大学生を派遣する事業)で取り入れることができそうとの感想が多かった。

教師ではなくファシリテーターとしてこどもと接したことで、教師となった時のこどもとの関わりや授業づくりをイメージし、役立てることができそうと記述した学生が多いことより、教員養成課程で学校教育以外の学びに触れる経験が、その後の学びや教師生活に良い影響を与える可能性が伺える。

5. 今後の予定

このカリキュラムを受講した学生が、その後どのように学びを深めていったのかを探るため、7月中旬にグループインタビューを行う予定である。

《参考文献》

山内祐平, 森玲奈, 内記麻子, 北川美宏, 木原俊行 (2010) 「ワークショップに関する理解向上を目的とした教員養成授業パッケージの開発」 日本教育工学会第26回全国大会講演論文集, p525-526